

聴く ◎ただ聴いてほしい◎

【エピソード】

典子さんは夫と高校生の娘たちと暮らす 40 代の女性。近くのスーパーでパートタイマーとして働いています。同僚の綾さんは一回り年下ですが、なんとなく気があって親しくなりました。

ある時、二人でお茶を飲んでいて、綾さんの息子大輔くん（8歳）のことが話題になりました。「うるさいほどおしゃべりで」と綾さん。典子さんは「ええやん、それだけお母さんが好きなんやろ。うちの娘ら、親には何も話してくれへんよ」と返しました。綾さんは「まだ子どもやから」と笑ったあと、一気に話し出しました。

「うち、一人っ子やんか？実はな、おとし、ほんまは大輔に弟か妹ができるはずやったんよ。大輔の後、なかなか子どもできんで、いろいろ病院行ったりして・・・」。典子さんは急に話題が変わったことに少しとまどいながら、ただ聴いていました。

「あきらめかけていた頃、やっと二人目を授かって、どれだけ嬉しかったか。大輔とも、毎日おなかの赤ちゃんの話をしてん。それが、妊娠7ヶ月で急に入院することになって・・・」。綾さんの赤ちゃんは結局死産。退院後もショックから立ち直れず、家事もまともにできない時期があったと言います。綾さんはつらい日々のことを一気に話し、典子さんはどう返事していいかわからず、ただ時折相づちをうちながら、聴き続けました。

1時間ほどして綾さんは落ち着き、「こんなにしゃべったん、初めてやわ。ありがとう」とお礼を言いました。典子さんが「そんな。何も力になれなくて・・・」と恐縮すると、綾さんは「そんなことない。

ただ聴いてくれるのが良かってん」と言いました。「死産の後、みんな励ましてくれた。『またできるよ』とか、『お母さんがしっかりしなきゃ』とか、『ダイちゃんのためにも笑顔で』とか。もちろん好意で言ってくれるねんけど、よけい自分がダメな母親の気がして・・・。それにおなかの子のことも簡単に忘れられへんかったし。私は自分の気持ちをためこんでいたんやと思う。」

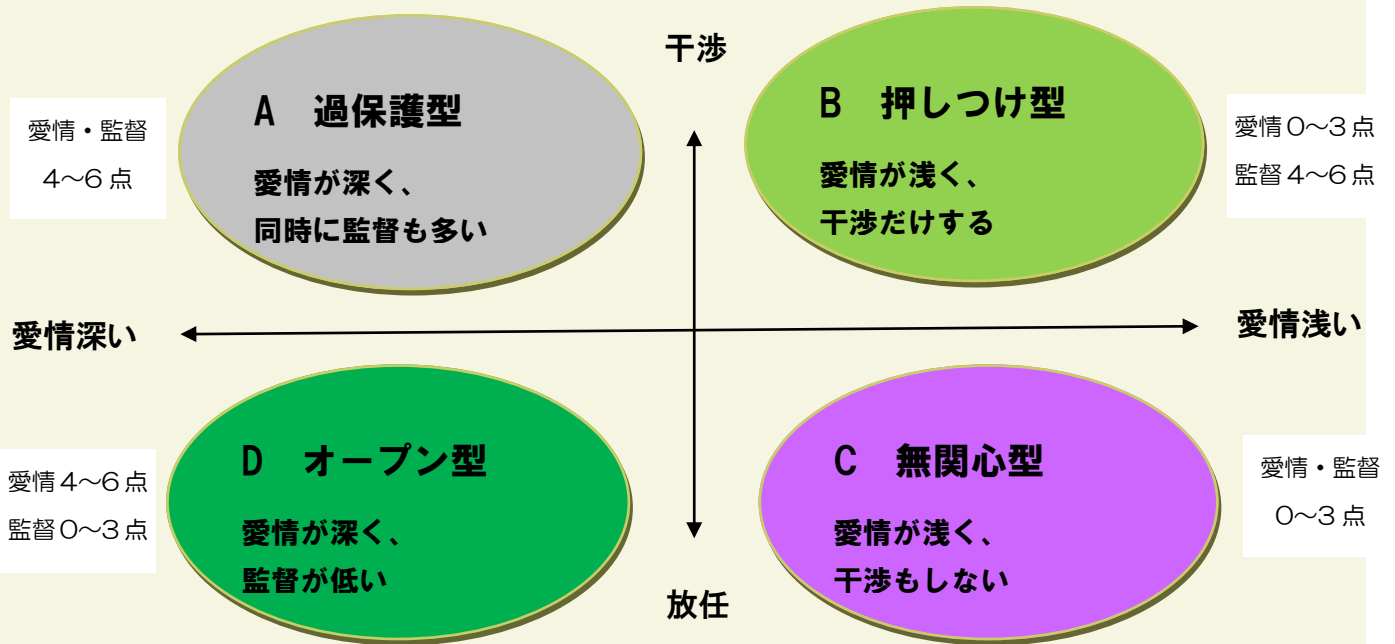
店を出て綾さんと別れた後、典子さんは下の娘（15歳）のことを考えていました。学校や友だちのことを尋ねても何も話してくれず、「何を考えているかさっぱりわからない」子です。これまで「お母さんに何でも話してね」と言ってきたけど、あの子にとって私は、どう映っているのだろう。あの子の気持ちをしっかり受けとめてきたのだろうか・・・。



対話の
ために

- 「アドバイスや励ましより、ただ話を聴いて欲しい」と思った経験はありますか？
- ふだんの家族との会話について思うことを、自由に話し合ってみましょう。

図1 親の愛情と監督 (4つのパターン)



※出典:河地和子著『自信力はどう育つか:思春期の子ども世界4都市調査からの提言』(朝日新聞社刊)

●次の質問はあなたの家族に当てはまりますか。当てはまる人に○をつけてください。
(母親、父親の両方に当てはまれば両方に、片方だけなら片方だけに○。当てはまる人がいない場合は「誰も当てはまらない」に○を、「その他の家族」の場合は、祖母、祖父のように、具体的に書いてください。)

質 問	回 答			
	母親	父親	その他の家族	誰も当てはまらない
Q(1) あなたに対して過保護なのは誰ですか。			【 】	誰も当てはまらない
Q(2) あなたに、自分のことを自分で決めさせてくれるのは誰ですか。			【 】	誰も当てはまらない
Q(3) あなたのやることに何でも口出ししようとするのは誰ですか。			【 】	誰も当てはまらない
Q(4) あなたが落ち込んでいる時、声をかけてくれるのは誰ですか。			【 】	誰も当てはまらない
Q(5) あなたのことをほめてくれるのは誰ですか。			【 】	誰も当てはまらない
Q(6) あなたの悩みを理解してくれていると思われるのは誰ですか。			【 】	誰も当てはまらない

【採点方法】

母親、父親、誰も当てはまらないという三つの項目から、それぞれの項目に誰が該当するかを回答し、該当するごとに1点を加算し、監督度、愛情度をそれぞれ合計します。

ただし、Q(1)～Q(3)は親の監督度を表し、Q(4)～Q(6)は親の愛情度を表します。また、質問の性質上Q(2)は逆配点とします。

【相関関係】

[Q(1)～Q(3)]においては、3点と2点を監督度が高い関係、1点と0点を監督度が低い関係

[Q(4)～Q(6)]においては、3点と2点を愛情が深い関係、1点と0点を愛情が浅い関係

●日本では、多い無関心型、少ない過保護型

日本では、Aの過保護型5.6%、Bの押しつけ型が7.7%、Cの無関心型が60.2%、Dのオープン型が26.4%である。

一般的に言って、日本の親は過保護であると信じられてきた。口やかましく子どもに注意するため、子どもは「指示待ちっ子」になっている。あるいは、子どもができるはずの身の回りのことも親が代わりにやっており、子どもは甘やかされていると信じられている。しかし、子どもたちの思いとは違うことが分かる。

図2 各国の子どもたちの「自信度」比較

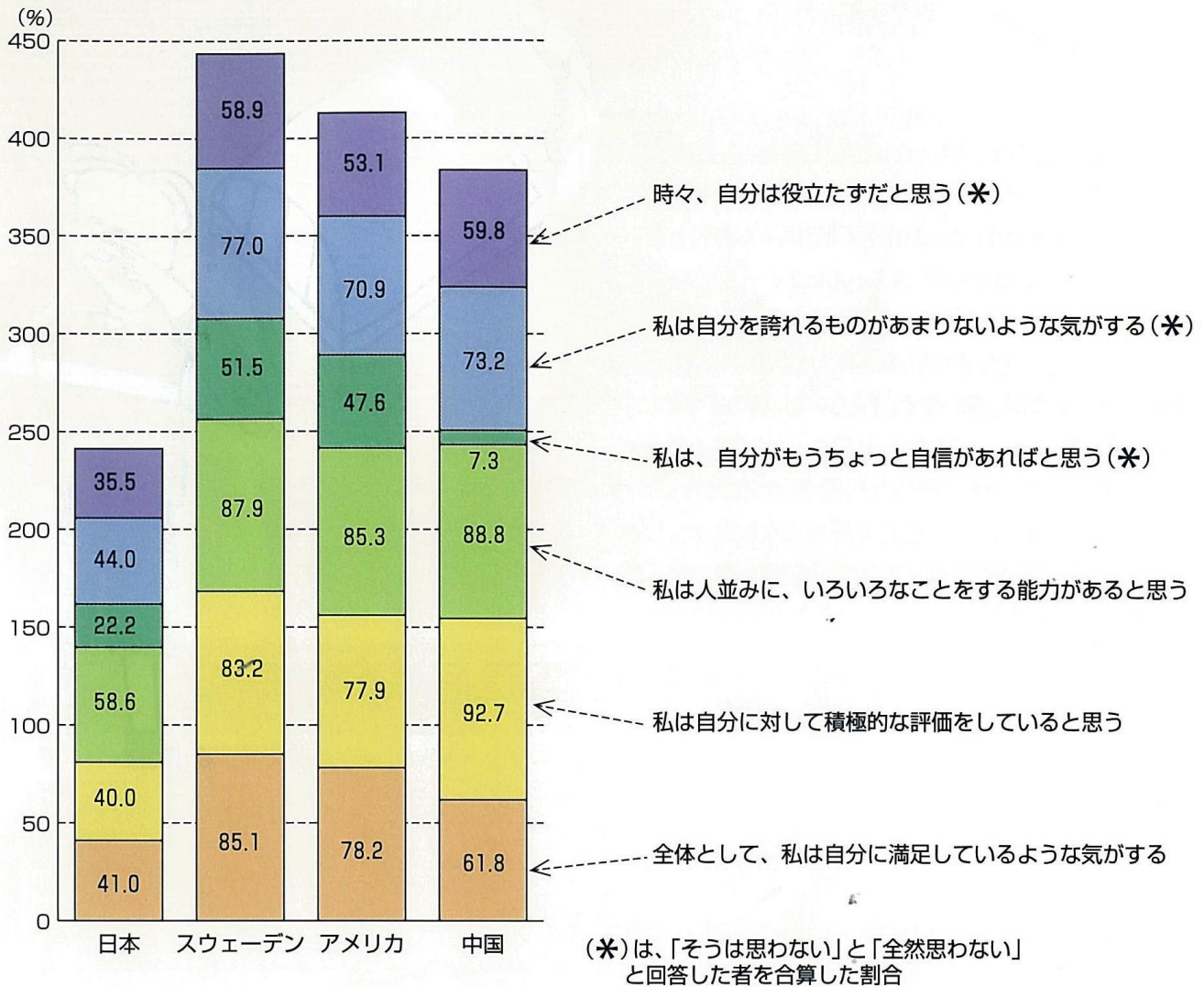


図2からは、スウェーデン、アメリカの子どもたちが、すべての項目にわたって高い自信度を示す一方で、中国では項目によって大きなばらつきがあることが分かる。

これに比べると、日本の子どもたちは、ほぼすべての項目にわたって非常に低い値を示している。もっとも顕著なのは「自分に積極的な評価をしている」の項目で、「強くそう思う」「そう思う」と回答した割合が、中国92.7%、スウェーデン83.2%、アメリカ77.9%と他の3カ国では非常に高い割合であるのに対して、日本の場合はわずか40%にとどまった。また「自分を誇れるものがあまりない」の項目では、「そうは思わない」「全然思わない」と否定する者が、他の3カ国では70%から80%の間にあるが、日本の子どもは半数にも満たない(44%)。日本の子どもたちの多くが自分に満足せず、誇れず、価値ある人間であると思えないとの自己評価を下している。

※出典：河地和子著『自信力はどう育つか：思春期の子ども世界4都市調査からの提言』（朝日新聞社刊）

1

10歳の男の子、Aちゃんは母親と妹の3人家族です。しかし、妹のBちゃんが難病にかかり、遠くの大学病院に入院してしまいました。お母さんはBちゃんの付添いで病院に行かなければならず、Aちゃんはよく一人でお留守番しています。しょっちゅう親戚や近所の方が家におかずを持ってきたり、様子を見にきたりしてくれます。Aちゃんは明るくふるまい、自分で食器も洗います。「えらいね、男の子なのに」、「Bちゃんが元気に帰ってくるまで、お兄ちゃんもがんばらなきゃ」と、近所の人はAちゃんを誉めたり、励ましてくれます。

Aちゃんは「けなげな子」と近所で評判になりました。しかしAちゃんは時々、むしように寂しくて、泣きたくなります。でも「妹ががんばってるのに」、「お母さんに心配かける」と思うと、自分の気持ちを外に出すことができません。



2

Aさんは鉄道会社の新入社員。研修のため駅で改札係をしているAさんの前に、車椅子の男性が現れました。話しかけてきましたが、何を言っているかわかりません。「やばい。こういうの、苦手」と内心焦りましたが、車椅子の男性の顔を正面から見て、「何、の、ご用件、で、す、か?」とゆっくり訪ねました。すると「きよ、きよ、きよお、ぼし、で、お、降り・・・」。Aさんはホッとして、「ああ、京橋で降りられるんですね」と答えると、男性はうなづきました。Aさんが、京橋駅に連絡する旨を伝えると、男性も微笑んで、「よ、よ、よろしく」と言い、さらにこう言いました。「ゆ、ゆっくり、言わ、言わんでも、わかるで。わ、わし、み、耳は、き、聞こえんねんから」。

男性が去った後、Aさんは、不思議に高揚した気分でした。「ちゃんと聴いたら、わかるんや。これまで、聴く気がなかっただけなんや。」

